自律的な学習を目指す日本語授業の取り組み

家田章子
桜美林大学　言語学系
shokoi@obirin.ac.jp

1.　はじめに

多文化共生社会の中で日本語教育に携わるには、常に学習者の多様性、個別性と向き合っていくことが不可欠である。教師主導ではない学習者を中心とした日本語学習の場を作るというだけでなく、学習者自身が自分の学ぶべきことを自分で決め、学習を進めることが、言語教育の中では重視されるようになってきている。自律学習[1)]とは、「学習者が自分で自分の学習の理由あるいは目的と内容、方法に関して選択を行い、その選択に基づいた計画を実行し、結果を評価すること」（青木 2005）である。このような学習者の自律的な学習を目指した取り組みのひとつとして桜美林大学では「チュートリアル」という授業が行われている。

2.　桜美林大学における「チュートリアル」

桜美林大学では学習者の自律を目指した個別対応型の日本語授業を「チュートリアル」と呼び、2003 年度より実施している。チュートリアルは、基本的に以下の流れにそって行われる。

Ⅰ 意識する	現在の自分の状況を認識し、自分が求めていることを意識する
Ⅱ 計画する	実践する内容を具体的に決める
	Ⅱ-1　学習目標を決める　Ⅱ-2　学習計画を立てる　Ⅲ-3　評価方法を決める
Ⅲ 実行する	自分の学習を管理しながら、実際に学習を進める
Ⅳ 振り返る	学習全体を振り返り、自己評価する

（桜美林大学日本語プログラム「グループさくら」(2007:26)）

これらはあくまでも基本的な授業の流れであり、留学の形態（学群留学／短期留学）、レベル等によりそれぞれアレンジをして授業が行われている。

3.　学群クラスにおけるチュートリアルの取り組み

3.1　学群 1 年生の日本語授業の構成

桜美林大学の 2008 年度入学者のカリキュラムでは、学群１年生で必修となっている日本語授業科目には「日本語専門基礎ＡⅠ」（週２コマ／２単位）、「日本語専門基礎ＡⅡ」（週２コマ／２単位）、「日本語専門基礎Ｂ」（週１コマ／１単位）の３つがある。

2008 年度春学期の目標は「日本語専門基礎ＡⅠ」では大学の授業で課されるようなレポート等

を書けるようになること、「日本語専門基礎ＡⅡ」では論理的な文章を読むこと、論理的に意見を述べること、講義を理解すること、言語知識（文法・語彙）の習得である。そして、「日本語専門基礎Ｂ」で個別対応型の授業「チュートリアル」を実施している。[2)]

3.2　学群クラスにおけるチュートリアル授業の流れ[3)]

①チュートリアルという授業の説明および
　リソースの探検　　…【配布シート「リソース探検シート」】

意識する　　…【配布シート「現状分析シート」】

②現状を認識する

計画する　　…【配布シート「チュートリアルですることを考えよう！」】

③解決したいことの決定

④解決のためのリソース選択、リソースの活用の仕方の決定

※個別報告・相談１回目

実行する

⑤各自の学習　　…【配布シート「チュートリアル学習記録」】

⑥中間発表　　…【配布シート「中間発表」】

※個別報告・相談２回目

⑦各自の学習　　…【配布シート「チュートリアル学習記録」】

振り返る

⑧自己評価　　…【配布シート「自己評価シート」】

※期末報告・相談

3.3　授業の実践

3.3.1　リソースの探検

大学で利用することができるリソースにはどのようなものがあるのかを知り、学習に有効だと思われるリソースを探す。リソースの探検をした後には、特に使いたいと思うリソースについてクラスで発表することになっており、他の学習者の発表を聞くことで自分は気づかなかったリソースや使い方に気づくこともある。

桜美林大学には日本語を母語としない学習者のための「日本語学習リソースセンター」があり、チュートリアルでも重要な役割を果たしている。また、書籍、ＣＤ、ビデオ、新聞、インターネットなどの「物」だけでなく、「人」もリソースとして活用できることを学習者に意識的に示している。教師はもちろんのこと、「日本語クラスゲスト[4)]」というボランティア学生に授業に参加してもらうこともしばしばある。

3.3.2　現状の認識

学習者は「現状分析シート」を使って、現在自分自身がどのような状況にあるのかを認識する。このことにより、大学入試や各種試験のために勉強してきた入学前とは異なり、大学内外での生活で必要になる力は何かをあらためて考えてみる機会を持つことになる。入学間もない４月の授業開始時には、必ずしも現在直面している問題を認識しているとは限らないので、問題点を挙げるだけではなく、日本語でできるようになりたいことを考えることで、現在取り組んでいくべきことを意識化するようにしている。

3.3.3　学習の計画

「現状分析シート」で挙げた項目の中から、自分がチュートリアルで解決したいことを決定し、なぜそれに取り組みたいのか、どうしたらそれが解決できるのかをシートに書き込む。また、それを解決するためのリソースの選択やリソースの活用方法を考える。

3.3.4　学習計画の実行

自分の立てた計画に従って、各自で学習をすすめる。学習者は「チュートリアル学習記録」に「今日やること」「やったこと」「成果物」に加え、質問や感想等を記入し、教師は毎回コメントを書き込む。学期の半ばには中間発表の時間を設定している。これは、自分の学習を振り返り、うまくいっていることや困っていることなどを発表するものである。クラスメイトの発表を聞いて自分の学習の参考とするだけでなく、お互いにアドバイスをすることになっている。

3.3.5　自己評価

「自己評価シート」にしたがってチュートリアル授業での取り組みを振り返り、来学期の目標も立てる。自己評価シートの内容は大きく「学習成果」と「取り組み方」の２つに分けられる。学習成果については、１）何を解決したかったのか、２）どのように解決しようとしたか、３）どのような成果を得られたかの 3 点について記述する。また、「取り組み方」については、１）自分のやりたいこと・問題点が分析できるようになったか、２）学習方法やリソースの選択は適切だったか、３）教材や周りの人（クラスメイト、先生など）を活用できたか、４）計画的に学習が進められたか、５）チュートリアルの時間を有効に使えたか、の５点について「○／△／×」の評価をした上で、なぜそのような評価をしたのか理由も記述する。「学習成果」と「取り組み方」の２つを受けて、総合的にチュートリアルの学習を 100 点満点で自己採点し、理由とともに記述する。

3.3.6　報告・相談

学群生のチュートリアルでは、１学期に３回「報告・相談」を行っている。１回目は計画を立てた直後、２回目は中間発表の直後、３回目は学期末に行う。チュートリアルの学習の進め方について確認をしたり、相談をしたりするものであるが、学期末の「報告・相談」は授業を振り返り自己評価をした上で、次の学期も視野に入れて教師と話す機会となる。

4.　チュートリアルの効果と課題

チュートリアルの授業を通して､学習に対する自主性や積極性が少しずつ身についていくのを実感する一方で、より効果的な授業とするための課題も多く感じる。まず、クラスサイズに限界があり担当教師以外の人的補助が不可欠であるが、十分な補助を期待できる人材を探し、あるいは育てるのは容易ではない。また、教師はそれぞれの専門科目を学習する留学生の学習をサポートするために、日本語以外のリソースの知識を増やす努力が必要である。それ以外にも、自律学習の押し付けにならないための工夫や他のクラスで課されるレポートなどを授業でどう扱うかも、「自律」した学習とは何なのかを再考しながら学習者と共に考えるべき課題といえよう。また、会話のような評価の難しい学習活動を選択した学習者だけでなく、「自己評価」をどのように行うかについては、ルーブリックの利用なども視野に入れながら考えていきたい課題である。

注

１）青木（2005）は、第二言語教育では学習者オートノミー（learner autonomy）という用語を使うほうが一般的であると述べている。

２）１年次の「日本語専門基礎Ｂ」以外に、卒業までの４年間で「チュートリアル」（短期留学生、学群留学生の両方が履修可能な科目）を４回（1 学期に１つ履修した場合は、４学期分）履修することができる。

３）授業の流れやリソース等の見直し作業は、毎学期何年にもわたって積み重ねられている。2008 年度春学期の「日本語専門基礎Ｂ」の担当者は以下のとおり。家田章子、今井美登里、槌田和美、三宅若菜（50 音順、敬称略）

４）日本語プログラムとして毎学期募集している。2008 年度春学期の登録者数は約 200 名。

主な参考文献

青木直子（2001）「教師の役割」青木直子他『日本語教育学を学ぶ人のために』世界思想社．pp.182-197

――――（2005）「自律学習」日本語教育学会編『新版日本語教育事典』大修館書店．pp.773-775

桜美林大学日本語プログラム「グループさくら」(2007)『自律を目指すことばの学習－さくら先生のチュートリアル』凡人社

齋藤伸子（2007）「大学生の日本語力を上げるには－日本語プログラムの実践－」『2007 年度 Obirin Today』桜美林大学．pp.43-57

佐々木倫子（2006）「パラダイムシフト再考」『日本語教育の新たな文脈－学習環境、接触場面、コミュニケーションの多様性－』国立国語研究所．pp.259-283